秋の黄昏と君

陽光が　次第に短くなる秋の黄昏時　長い自分の影を踏みながら
あの不思議な君に会いたくて　足早に歩いていた

買い物で賑わう街
時間を忘れて　小石を蹴っている子供たち
寄り添いながら　楽しそうに　通り過ぎていく学生
自動車のテールランプがはっきりと黄昏に映えてきた



家々にあかりが灯り始めた
夕食の準備が始まる

この坂を下って右に曲がれば　君がいる
早く会いたい

秋がまだ　その装いをしっかりと準備していない時に
ぼくにとって　秋を秋として感じられるのは　君の存在だ　遠くにいても
感じることができるのに　もっと　感じようと　近づけは近づくほど　わからなくなる
消えてしまいそうな　不思議な君

そう　君は　キンモクセイ、、、

（by T,O）